

忘れえぬ人々

—松本悟朗から高橋五郎の方へ—¹

金 沢 篤

かういふ時代に「過去」の焼印を捺されてしまった作家の価値といふものは、それに焼印を捺した新時代が栄えてゐる間は殆ど再認識されるものではない。大体再認識されるのはその新時代の又次の時代が擡頭した頃である。つまり息子から追ひまかれて、孫から再認識されるのである。それが歴史といふものである。²

はじめに

「多摩川の二子の渡をわたつて少しばかり行くと溝口といふ宿場がある。其中程に亀屋といふ旅人宿がある。」(232頁) これは國木田獨歩の有名な『武蔵野』の「忘れえぬ人々」の書き出し。授業のために二子玉川、つまり「二子の渡」までは毎週のように通っているわたしだが、多摩川を渡ることはまずしない。電車に乗らなくとも、多摩川鉄橋に並行してかかる二子橋の歩道を歩いてもほんの数分しかかからない筈、なのにしない。なぜか。渡らない理由ではなく渡る理由がないからだ。せいぜいが多摩川の上にせり出した東急田園都市線二子玉川駅のホームの上から広々と開けた多摩川の風景を眺望したり、対岸の堤防近くに奇妙な樹木のように立つ大きな白いオブジェを見霽かすばかりだ。天才芸術家の岡本太郎がその地ゆかりの亡き母岡本かの子のために作ったものだとか。「ああ、川の向こうは神奈川県川崎市二子新地」。

ふと思ひ立って、溝口駅の一つ手前、二子新地駅との間の高津駅へ。むろん東急田園都市線の電車で。二子玉川駅から数分のところ。ネット上にアップを予定している松本史朗 [1973³] のためだ。若き松本史朗氏が自らの祖父松本悟朗氏の思い出を綴った文章が掲載された雑誌が、高津図書館友の会誌『たちばな』第38号である。その文のコピーを松本史朗氏より頂戴してから既に四半世紀以上が経つ。にもかかわらず、これまでその雑誌を手にしたこともなけれ

ば、その「高津図書館」とはどこかとか、なぜ松本史朗氏がそのような雑誌に書くことになったのかとか気にかけてはなかつた。その文章についても松本氏にあれこれ尋ねたりしたことがなかつたように思う。好奇心の旺盛なわたしとしては不思議と言えぱ不思議だし、うかつと言えぱうかつだが、個人的な内面の思いが率直に吐露されたような文学的なエッセイで、如何に歴史上の有名な人にまつわることとはいえ、松本悟朗氏が「自分の生い立ちについて他人に語ることを好まなかつた」（30頁）との件を目にするまでもなく、一介の他人に過ぎないわたしのうちに、日頃身近に感じている松本ファミリーの私事を詮索することの躊躇いが起こつたとしても無理からぬことだ。当時松本史朗氏とは、松本悟朗・岩野泡鳴⁴論争や、その論争が展開された雑誌『第三帝国』のことをわずかに話題にしたばかりであつた。それでもわたしはこれまで公にした文章の中で一度だけ松本悟朗氏について言及したことがある。松本史朗氏の最初の学術的な著作『縁起と空—如来蔵思想批判—』に対する手紙文を装つた書評、金沢篤 [1990] の中で、次のように書いたのである。

「バートランド・ラッセルのわが国における初期の紹介者であつたあなたのおじい様、一代の文学者岩野泡鳴に対して果敢に思想論争を挑まれた故松本悟朗氏よりの影響を密かに強く自覚しているあなたは、本書においてわが国の代表的な幾多の学者の貴重な業績をしっかりと受け止め、およそ考えられる限りの公正さをもって、御自分の研究成果を示されました。」(434頁)

なんと、高津図書館はこんなにも身近にあつたのだ。そしてそのことを知るや、すぐに出かけて行く気になつたのは、わたしの方にもそうした問題に取り組む下地が出来ていたということであろう。近代日本に於けるインド学仏教学の成立と展開、ないし近代日本に於ける外国文化の受容などをめぐる書誌学的研究への情熱が今のわたしを突き動かしているのだと思う。初めて高津駅に降り立ってから、数分後には川崎市立高津図書館の前にわたしは立っていた。そして一時間ほどをその高津図書館の閲覧室で過ごすうちに、松本史朗 [1973] をめぐって、いつしかわたしが秘かに抱え込むことになつた疑問のすべてが解けたように思われた。再び多摩川を渡って世田谷に戻り、大学の研究室に着くころには、取り敢えずはブログ上に「忘れえぬ人々」の表題の下になにかエッセイのようなものを連載する心づもりが出来ていたということである。

そう、何を隠そう、松本史朗 [1973] の掲載された高津図書館友の会誌『たちばな』第38号の発行人が勢多左武郎氏であつた。そして「昭和五十六年十一

月に長逝された」この勢多左武郎氏とは、松本悟朗氏が論陣を張った『第三帝国』やその後継雑誌『洪水以後』を主宰した茅原華山氏の令孫茅原健氏による茅原健 [1985] で、『第三帝国』や『洪水以後』の同人であって今なお健在でおられるのは、元同盟通信海外局参事勢多左武郎氏お一人である。明治二十一年三月十八日のお生れというから卒寿。お元気である。現在は川崎市高津で自適の生活。(90頁)と紹介される人物である。勢多氏は『たちばな』の第35号以来の同誌の発行人を務め、同誌には第34号から一応の終号となった第38号まで継続的にエッセイを掲載している。なかでも今の場合重要なのは、第37号の勢多 [1972] と第38号の勢多 [1973] の二篇である。松本悟朗氏も勢多左武郎氏も、その回想文の表題「『第三帝国』から『洪水以後』へ—あのころの若人たち—」の「若人たち」の一人であったとすれば、松本悟朗氏の令孫である松本史朗氏が、その『たちばな』第38号に祖父松本悟朗氏の回想文を寄せていることの意味ももはや明瞭となったとわたしは考えたのである。

そして勢多左武郎氏にとっての忘れえぬ人である松本悟朗氏、また松本史朗氏にとって忘れえぬ人である松本悟朗氏、そしてわたしにとってもやはり忘れえぬ人となった松本悟朗氏を求めての小調査旅行の目的地ではしなくも先ず目にしたのが、川崎市立高津図書館前の國木田獨歩の「忘れえぬ人々」ゆかりの石碑であったことが、むしろ重要であったかも知れない。しかもその石碑に刻み込まれた文字が、やはりわたしにとっては忘れえぬ人である明治の文豪島崎藤村によるものだとしたら、こうしたわたしの思いが、「忘れえぬ人々」の連載となって形を取り始めたことの意味もおのずと了解されると思うのである。『忘れ得ぬ人々』と言えば仏文学者の辰野隆氏、『思ひ出す人々』と言えば不知庵内田魯庵氏、『明治文壇の人々』と言えば「文学界」の馬場孤蝶氏、いずれも近代日本にあって異文化と格闘して生き、倒れた有名無名の人々について語った懐かしい書物とその著者、語り手である。

1. 松本悟朗氏の生涯

「祖父は、殆ど名を成さなかった。」松本史朗 [1973] の中で、松本史朗氏が自らの祖父悟朗氏を評したフレーズ中、最も印象的なものがこれである。松本史朗氏は、どのような思いでこの言葉を書き付けたのだろうか。恒河沙の中を歩行する貝殻の如きわたしなどよりすれば、多数の著訳書を世に送り、雑誌に夥しい分量の署名入り記事を書いた人物は、もうそれだけで十分に名を成した

有名人と考えられるのだが、どうやらそんなものでもないらしい。その松本史朗氏の心情を補足的に語る記述が、雑誌『第三帝国』や『洪水以後』などを主宰した茅原華山氏をめぐる貴重なドキュメント、茅原健〔1985〕の著者、華山氏の令孫茅原健氏によって与えられている。「勢多左武郎氏を介して、松本悟朗の令孫にお会いする機会があって、この稿のためにおじいさんの略歴をお願いした。戴いたお手紙には」（133頁）として、松本史朗氏の手紙の次のような文面が引かれている。

「祖父にも意気軒昂とした自信に満ちた時代もあったようですが、私には失意の祖父の姿ばかり眼にちらつきます。大成しなかった学者または大成しなかった思想家、こうゆう祖父の姿は、私にとってのみなつかしいものです。他の人々にとってははかかわりのないもの、「忘れられたままにしておけばよい」ものではないでしょうか」（134頁）

「折角、祖父のことを書いて下さるなら、一言、「松本悟朗は天才だった」と書いて下されば良いと思います」（134頁）

なかなかおしゃれな手紙だが、茅原健氏は、この松本史朗氏のこましゃくれた希望を容れてか、その茅原健〔1985〕、すなわち『茅原華山と同時代人』の、「松本悟朗のことなど」という副題を持つ第14章の直接的に悟朗氏に触れる部分の見出しを「松本悟朗は天才だった」としている。「忘れられたままにしておけばよい」と言った当の松本史朗氏は、松本史朗〔1973〕を書き、そして、一方ではその茅原華山氏の令孫茅原健氏の希望を容れてか、松本悟朗氏の「略歴」などを書き送ったのではないだろうか。そしてその情報を反映させたものが、茅原健〔1985〕のその第14章の最後に次のように記されている⁵。松本悟朗氏の生涯に関してこれまで書かれた簡潔ながらも最も網羅的な記述であると思われるので、それを以下に引こう。

「松本悟朗。明治十九年八月十八日に福島県の板倉の藩士米山家に生れた。家貧しく、桑析町の曹洞宗慈雲寺の松本達宗の養子となる。明治四十四年三月二十五日、東洋大学専門部第一科二種第二十一期生として卒業。その後『第三帝国』、『洪水以後』、『内観』の同人となって華山とともにあった。戦争中は、福島県に疎開。戦後再び上京してまもなく、昭和二十一年十一月八日に長逝した。戒名、哲心軒焦魂学道居士。無類の酒好きであった。

なお、現在までわかっている松本悟朗の著訳書⁶は次の通りである。
『全訳政治の理想』（ラッセル著 大正九年 日本評論社）

『合理的賃金制度』（ヘンリ・アトキンソン著 大正九年 日本評論社）

『ラッセル論集』（大正十年 日本評論社）

『神秘主義と論理』（ラッセル叢書1 大正十年 日本評論社）

『哲学における科学的方法』（ラッセル著 大正十一年 未見）

『文化の話』（大正十一年 日本評論社）

『近代社会思想八講』（大正十三年 新报社 昭和二十三年 有隣堂出版より再版）

『亜細亜民族と太平洋』（昭和十七年 誠美書閣）（134-135頁）

これによって、松本悟朗氏の生年が明治十九年（西暦1886年）と知れるのであるが、松本悟朗氏の生涯を客観的に他者に伝えようという意志の希薄な令孫松本史朗氏の松本史朗 [1973] には、「祖父が逝った昭和二十年は私の生れる五年前だから、私は生前の祖父をしらない。しかし祖父のおもかげは、私にとって幼い時から夢寝にも忘れ得ぬ親しい、なつかしいイメージだった。」（30頁）とある。幼いおませな孫にとって相見ることのなかった祖父悟朗氏はいわばヒーローだったことが知れてほほえましいが、没年に関して一年の食い違いがある。どちらが正しいのだろう。

「松本 [悟朗：筆者註] は私と同様、福島の新藩士、貧乏士族の俸に生れ、幼少のころ、寺へ養子にやられた、と言った関係から私とは親の代からの知り合いで、とくに私たちは趣味を同じくするところから、その交際はほとんど生涯を通じたと称しても過言ではないであろう」（勢多左武郎 [1972] 32頁）と語る勢多左武郎氏は、松本悟朗氏の人となりを簡単に評して次のように記している。

「覇気あり、俠気あり、評論家として、また思想家としてもすぐれた能力の持主であったが、惜むらくは彼の酒癖が禍して、伸び悩んだ嫌いがあったかに想われる。それにしても第二次大戦が終局を告げた昭和二十年十一月十八日、食糧難の真最中、心臓マヒで倒れたのは惜しい。享年五十八歳。法名は哲心軒焦魂学道居士。」（32頁）

茅原健 [1985] の上引の「略歴」記述は、もしかしたら松本史朗氏による情報に基づくものではなく、勢多 [1972] のこの記述や、勢多氏よりの伝聞に基づくものかも知れない。松本史朗氏にその経緯を伺えば済む問題だろうが、気が進まない。ただ一つだけはっきりさせておかなければならないのは、松本悟朗氏の没年はやはり昭和二十年、享年は五十九歳であるということである。天才松本悟朗氏は多くの著書書を残したものの、残念ながら六十歳にならずして

失意のうちに世を去ったものようである。これが松本史朗氏の「祖父は、殆ど名を成さなかった」の背後にある真情であろうと想像する。誰がつけたのであろうか、いや、おそらく生前悟朗氏自身によって考案されたに相違ない、その戒名「哲心軒焦魂学道居士」が何よりも松本悟朗氏の生涯を雄弁に語っているように思われる。「常に哲学の心を持って、学道に魂を焦がし、遂に殆ど無名の人として世を去った、と松本史朗氏は祖父悟朗氏を思っているであろう。有り余る才能に恵まれながらも、松本悟朗氏は、自身「不遇」と感じ、そして必ずしも思うような成果を残すことなく「大成することなく」逝ったようだ。なぜか。茅原健 [1985] に記された松本悟朗氏の略歴にあった、略歴には珍しい「無類の酒好き」をその理由として挙げるのが普通に行われている。勢多 [1972] の「彼の酒癖が禍して、伸び悩んだ嫌があった」に注目するまでもなく、また松本史朗 [1973] の「[祖父とお酒]というテーマ」(31頁)を想起するまでもなく、松本史朗氏のあの「他の人々にとってははかかわりのないもの、「忘れられたままにしておけばよい」もの」には、祖父の「酒好き」「酒癖」を恨めしく思う家族全体の思いが、ひいては憤りのようなものまでもが滲み出ているように感じられる。

茅原健 [1985] の「二流の人」と題された第14章の書き出しは、次のように始まっている。

「広津和郎が文壇に登場するきっかけとなった旬刊誌『洪水以後』の主だった同人には、広津をはじめ、鈴木正吾、鈴木悦、小田政賀、勢多左武郎、そして松本悟朗などがいる。広津を除いてはいずれもほとんど無名に等しい。」(127頁)

松本悟朗氏の名前は聞いたことがなくても、ある程度の年配の者なら広津和郎の名前には聞き覚えがあるかも知れない。つまり広津和郎と松本悟朗とでは知名度は段違いということのようだ。明治文壇で活躍した硯友社の作家広津柳浪を父とし、松川事件でも名を挙げた小説家広津和郎氏は有名で、思い半ばにして世を去った孤高の松本悟朗氏は文字通り無名と言うべきなのであろうか。

茅原健 [1985] には、またこうもある。

「『第三帝国』や『洪水以後』に集結した若き俊英たちは、いずれも当代一流の人物たらんの意気に燃えて勉励したのであろうが、いつの世にも運不運というものがつきまとい、後世に名を残す者は限られて少ない。世に出ず、また世に入れられず失意のうちに消えてしまったこれらの俊英たちを、世間

では二流というのであろうか。なれば、この二流こそ捨て難い。」(133頁)

いかがであろう。わたしはこの茅原氏の表題の立て方や扱いには不満だ。わりに有名になった広津和郎は「一流」で、「無名に等しい」者は「二流」というとらえ方を指して言うのである。文筆家の場合、著訳書の多寡によって有名・無名の色づけはやむを得ないにしても、それを安易に一流・二流に置き換えて欲しくないと言っているのだ。だが、広津和郎氏は戦後まもなく日本芸術院の会員（文芸部門）に推挙されている。その分野では押しも押されもしない一流の芸術家と言い得るのであろう。

広津和郎 [1963] には、次のような件がある。

「しかし『洪水以後』に辞職届を出さない前に、雑誌そのものが潰れてしまった。それは茅原兄弟を向うにまわして、編集局全員が争議を始めたためであつたが、どういう原因で争議を起したかは、出社しない私には解らなかつた。」(220頁)

「君は日頃から茅原茂⁸に対して不愉快を感じていた筈だから、出て来てわれらの仲間に加わってくれ」という意味の速達を争議団からよこしたが、既に辞職を決心していた私は、心が雑誌からすっかり離れていたので、今更その喧嘩の仲間入りに出かけて行く興味はなかつた。」(220-221頁)

また、勢多 [1972] には、次のようにある。

「ことに『洪水以後』のばあいは松本悟朗を総指揮とする争議団と、茅原兄弟の争いで、今日では年中行事のようにになっているサラリーマンの俸給値上げ要求ストと選ぶところがなかつたのだ。」(27頁)

これよりする限り、松本悟朗氏は『洪水以後』の編集局の一員であり、俸給を廻って争議が起った際には、その争議団の代表的役割を果たしたものである。現に『洪水以後』を見ると、毎号、「社会評論欄」は松本悟朗氏が、「文芸評論欄」は広津和郎氏が担当している。あの広津柳浪氏の息子であり、自身作家としても知られる広津和郎氏と松本悟朗氏は同じ雑誌で肩を並べていた筈であるが、二人の間にどのような交流があつたかは知られないのである。広津和郎 [1963] には、こんな件もある。

「そこで華山氏から改めて編集室につれて行かれ、机を並べている五、六人の人達に紹介されたが、みな私と同年配か少し上ぐらいで、兎に角二十代の青年達ばかりであつた。その中には後に代議士になつた人などもいた。」(210頁)

広津氏には、同僚に対する関心は皆無だったようだ。広津和郎氏は、18911205

～19680921だから、松本悟朗氏より五歳年少ということになる。たとえば松本史朗 [2010] の冒頭でも触れられる芥川龍之介は、18920301～19270724だが、大正七（1918）年十二月に書かれた「あの頃の自分の事」には、広津和郎氏の名前は出てくるものの、松本悟朗氏の名前は出てこないのである。

こうした回顧録は、語り手の関心が奈辺にあるかに尽きる。誰に焦点を当てたかどうかという点である。有名・無名、一流・二流とは関わりのないことだが、回顧される当事者にとっては、回顧する者が有名人か否かが大事な問題となる。回顧者が有名人であれば、回顧される者も注目を浴びることになる。回顧者の人物や回顧される人物そのものとは全く関わりのない話である。こうした回顧談の本質を顧慮しての、松本史朗氏の「忘れられたまま」発言であることは明らかであろう。茅原氏は何故そこに実質さほど有効ではない虚辞に過ぎない「一流」や「二流」を敢えて用いる必要があったのだろうか。

また書物を通じてのみ知る他ない人物に思いを寄せる場合、なにがしかの形でそのポートレートを見れるかどうかということは大きい。残された写真を見て、自分が抱いていたイメージががらりと変わる場合も多々あるのである。松本悟朗氏の場合、若い頃より見知った松本史朗氏のおじいさまということでその著作やエピソードの上に、あれこれとイメージを作り上げてきたような気がするが、長年松本史朗 [1973] の「当時流行のインパネスを着てステッキをついた颯爽たる祖父の写真が今も残っている」(31頁) によって想像力を刺激され、このほど勢多 [1972] の「史朗君は当年二十二才。若かりし日の祖父、悟朗に生写しの好青年」(33頁) を目にし、また茅原健 [1985] の中に、問題のインパネス写真 (133頁) を実見、あるいは『洪水以後』に掲載された同人記念写真の中の悟朗氏を見るにつけ、そのイメージが筆者の中にも明確に形作られるにいった。

わたしたちの松本悟朗観は結局令孫松本史朗氏の以下のことばに集約されるべきかも知れない。わたしは、弱冠二十二歳で以下のようにそのエッセイを結びこの出来た松本史朗氏に対し心からの敬意を表したいと思う。

「最後に思うことだが、祖父の一生は、私どもの考えるほど、それほど不幸でもなかったのではないか。祖父には案外、ノン気な面も茶目気もあり、人なつっこい人で、また多くの人から愛され、それらの庇護も受けたのであった。ともかくもその生涯を通して、自分の好きな道を歩むことができた祖父は、見

方によっては大いなる幸福者であったかもしれぬのである。」(32頁)

こうした松本悟朗氏のイメージをさらに豊かに膨らませてくれる資料が美作太郎 [1975] である。松本悟朗氏に関しての暗いイメージを吹き払うような、のどかなエピソードを伝えるものでもあるという点で、わたしは、この美作 [1975]⁹もとても好きだ。

最後に弱冠三十歳の松本悟朗氏自身による「同人と女性」の観点からの松本悟朗評があるので、それを紹介しておきたい。時代の雰囲気の色濃く反映させたものであるとしても、自身について語ることの多くなかった松本悟朗氏の人となりを考える上で貴重な記述であると思われる。

「最後にかく申すそゝろごと子¹⁰に就いて一言する。そゝろごと子は男振りはそう悪い方でない。野暮な男ではあるが、三味の音色のよしあし位は多少分る。酔へば端唄の真似位はやつて見る気になる。一但しからきり駄目だが一も少し酒と理屈癖とをやめ、且つも少し上手を出せさへすればまんざらものにならぬ男でもなさそうだ。併し大体に於て女にそう嫌はれもしないが、余り惚れられもしない。一体極下手な上に可成押しが弱いので兎角問題の人となる資格がない。」(「そゝろごと」『洪水以後』第2号37頁)

2. 松本悟朗氏の著訳書

松本悟朗氏は五十九年という決して長くはない生涯において、以下のリストに見る通り、かなりの数の著訳書をモノしている。バートランド・ラッセル他の翻訳家として名高いが、哲学や社会や歴史や婦人論に関する著訳書も少なからずある。雑誌『第三帝国』『洪水以後』などの同人としては毎号のように多岐に亘る署名入りの記事を書いている。したがって、単なる翻訳家ではなく、独自の思想家ないし評論家と呼ぶに値する存在である。氏の思想的立場は、『ラッセル論集』の二十一頁に亘る力作序文「社会改造家としてのラッセル」の、ラッセルに対するシンパシー溢れる言葉の端々に明瞭に見て取れると思われる。筆者の知る限り、松本悟朗氏の最初の書物はアトキンソンの著作の和訳、松本悟朗 [19191115] である¹¹。松本悟朗氏、三十三歳の仕事である。

松本悟朗著訳書リスト (18860818~19451118)

[19191115]：訳『合理的賃金制度』（アトキンソン著）日本評論社出版部：東京

[19191210]：訳『全訳 社会改造の原理¹²』（ラッセル著）日本評論社出版部（時

國理一)

- [19200125]：共訳『全訳 自由への道（第三版）』（ラッセル著）日本評論社出版部（板橋卓一&時國理一）
- [19200205]：訳『政治の理想』（ラッセル著）日本評論社出版部
- [19210218]：訳『ラッセル論集¹³』日本評論社出版部
- [19210415]：訳『労働運動と新哲学』（スコット著）世界思潮研究会：東京
- [19210801]：訳『神秘主義と論理』（ラッセル叢書第一編）世界思潮研究会
- [19210815]：訳『自由教育に於ける科学の位置』（ラッセル叢書第二編）世界思潮研究会
- [19210903]：訳『物理学对感覚與料の關係』（ラッセル叢書第三編）世界思潮研究会
- [19210913]：訳『数学と形而上学者』（ラッセル叢書第四編）世界思潮研究会
- [19211007]：訳『哲学に於ける科学的方法』（ラッセル叢書第五編）世界思潮研究会
- [19211020]：訳『物質の究極的要素』（ラッセル叢書第六編）世界思潮研究会
- [19211130]：訳『原因の觀念に就て・直知と叙述知』（ラッセル叢書第七・八編）世界思潮研究会
- [1921?/22]：訳『ラッセル叢書¹⁴』（合冊・全七卷）世界思潮研究会
- [19220620]：著『哲学の話¹⁵』（吾等何を学ぶべき乎 第1期第4編）世界思潮研究会
- [192302]：訳『米国に於ける労働運動の発達』（ホイラー著）世界思潮研究会（世界パンフレット通信138）
- [192302]：訳『同盟罷業の意義』（レオン著）世界思潮研究会（世界パンフレット通信142）
- [19240930]：著『近代社會思想八講』新出版社：東京（192408自序）
- [192511]：訳『政治の理想 7版』成光館出版部：東京（6版）
- [192611]：著『近代社會思想八講¹⁶』成光館出版部：東京
- [192711]：訳『大衆罷業、党及び組合』（ルクセンブルグ著）白揚社：東京
- [192710]：訳『經濟制度に於ける政治の理想¹⁷』（ラッセル著）スキア書院：東京
- [192805]：訳『労働哲学¹⁸』（スコット著）三弘社出版部：東京
- [19280520]：訳『労働哲学概論¹⁹』（スコット著）緑陰社：東京
- [19281222]：訳「社会改造の諸原理²⁰」（ラッセル著）『社会思想全集』第35卷

平凡社：東京

- [1930]：訳『僕の産業哲学』（フオード著）アルス：東京
- [19301015]：訳『女性禍—近代フェミニズムの破綻—』（クヌットセン著）一元社：東京
- [193106]：訳『女性錯覚²¹』（クヌットセン著）一元社
- [193106*]：訳『マタ・ハリ』＜世界人伝記叢書第2巻＞（クールソン著）春陽堂：東京
- [1931]：訳「ルーズヴェルト」『ムツソリニ／ルーズヴェルト』＜世界人伝記叢書第4＞（ルーズヴェルト著）春陽堂
- [1931]：共編『尖端語百科辞典』尖端社：東京（早坂二郎）
- [1931]：共編『モダン新語辞典²²』浩文社：東京（早坂二郎）
- [1937]：著『領土資源の再分配問題²³』日本協会出版部：東京
- [193805]：著『北支農村の更正策²⁴』日本協会出版部〈日本協会パンフレット40〉
- [1941]：著『南方共榮圏讀本』新興亞社：東京
- [1942]：著『亜細亞民族と太平洋』誠美書閣：東京
- [19420920]：著『印度と濠州』聖紀書房：東京
- [19430208]：訳『濠洲發達史』（スタール著）武蔵野書房：東京
- [19440120]：訳『中南米（發達）全史』（リッパイ著）国際日本協会：東京
- [19481210]：著『近代社會思想八講²⁵』有隣堂出版：東京（自序なし）
- [199504]：共編『尖端語百科辞典²⁶』＜近代用語の辞典集成16＞大空社：東京

3. 松本悟朗氏のラッセルの翻訳

松本史朗氏は松本史朗 [1973] の中で、自らの祖父悟朗氏の業績に関して次のように言う。

「バートランド・ラッセルの研究者、市井三郎氏は氏のラッセル訳書の解説中、祖父を日本では初めてラッセルを翻訳し、わが国に紹介した人物と称しているが、正しく一連のラッセルものが祖父の残した業績の中では、最も傑出した存在として認められるべきであろう。」(30頁)

ここで市井三郎氏の「ラッセル訳書の解説」というのは、市井 [1966] の「ちなみにラッセルが、中国滞在ののち一九二一年（大正一〇年）に日本へきたときは、『社会改造の諸原理』の著者として招かれたのである（松本悟朗氏による翻訳が出ていた。おそらくこれが、日本語に訳された最初のラッセルの

著書だろう。)。(373頁)を指している。おかしな日本語であるが、言いたいことはわかる。また、松本悟朗氏の近くでやはり『第三帝国』や『洪水以後』で活躍した勢多左武郎氏の回想文、勢多 [1972] でも、「最初にバートランド・ラッセル著「社会改造の原理」を翻訳、解説したのは彼で、引きつづき「自由への道」その他のラッセルものを日本評論社から出している。」(32頁)と記しているし、松本悟朗氏の影響を率直に語っている美作太郎氏も美作 [1975] では、市井 [1966] の同じ箇所に触れてその事実を受け入れている。したがって、これらよりする限り、松本悟朗氏が、わが国におけるラッセルの最初の紹介者であると言い得るように思われるのだが、その美作 [1975] の言及に対して、ラッセルの書誌学的研究者の松下彰良氏は、ポータルサイトで「松本悟朗訳より一ヶ月前の一九一九年十一月に文志堂から、高橋五郎²⁷訳で『社会改造の原理』が出版されている。単行本としては日本で最初のラッセルの著作の訳書と思われる。」と注記している。松下氏は、ラッセルの同一の著作に対してほぼ同じ時期に刊行された二つの訳書、松本悟朗 [1919] と高橋五郎 [1919] の間の奥付の発行日の一ヶ月ほどの差を踏まえてそう言うのである。

だが、松本悟朗 [1919] の「一九一九年一二月 訳者」とある訳者松本悟朗氏による同書巻頭部の「凡例」初っ端の「一、我国の紹介者達は、本書の著者を一般にベルトランド、ラッセルと呼び馴れて居るが、此れは矢り英語読みに、バートランド、ラッセルと呼ぶ方が妥当であると私は信ずるから、そうしておいた。」を目にし、原著者前書きも解説も何一つない翻訳だけの高橋五郎 [1919] に於ける著者名が「ベルドランド、ラッセル著」となっているのを見ると、松本悟朗氏は、高橋 [1919] そのものかそのものの広告文などを踏まえてその凡例を書いている可能性は大である。ラッセルの同書の翻訳を世に送っている市井三郎氏は果たして松本 [1919] の巻頭部に置かれた松本悟朗氏によるその「凡例」を精読しているのだろうか。他人が汗水垂らした仕事などどうでもいい。いつの時代も、とにかく自分の仕事だけが、といった精神しか見えてこない「翻訳業界」である。いずれにしても、この松本悟朗 [1919]、バートランド・ラッセルの著作の「全訳」と謳った松本悟朗氏の業績であるが、これもその「凡例」を精読したならば、それが松本悟朗氏の単独の訳業ではないことが知れるのである。

もう一度、松本悟朗 [1919] の「凡例」の全文を以下に引こう。

「一、我国の紹介者達は、本書の著者を一般にベルトランド、ラッセルと呼

び馴れて居るが、此れは矢り英語読みに、バートランド、ラッセルと呼ぶ方が妥当であると私は信ずるから、そうしておいた。

一、原著者の脚註の中、我々日本人には、さまで適切又は必要でないと思はるゝものは多少省いたが、それが為めに本書の旨意を、損じるやうなことはなかつたと確信する。

一、翻訳に相当の時日を要した為めと、充分修正の暇がなかつた為めとで、文体、用語、句読の切り方等に、多少の不統一を來たし、或は訳文や、訳語の妥当を欠いた点のあることを、甚だ遺憾に思つて居る。

一、翻訳の終りに近づき、突然郷里から父²⁸危篤の報に接し、為めに第七講の終りと、第八講の全部とは、此れを同じ仕事に従事して居る友人時國理一氏に依頼した。

一、翻訳の巧拙当否は別として、一行でも、原文を省略してないことをお断りしておく。

一、本文中文字の代りに点線を施してあるところは、其筋の注意に依り抹殺したものである。

一、最後に本書の訳出に当つて、先輩馬場孤蝶²⁹先生の懇篤なる助言を仰ぎ、裨益するところ多かりしことを感謝する。

一九一九年一二月 訳者」(凡例1-2頁)

これを改めて見るに、この松本悟朗 [1919] は、実質松本悟朗・時國理一の共訳と呼ぶべきものである。諸般の事情により十分にブラシュアップする時間がないまま刊行せざるを得なかつたものようである。その一番の理由は、同一の書物の翻訳が、いち早く刊行されてしまったことと関係しているものと思われる。つまり高橋五郎 [1919] の刊行である。「本邦初訳」の栄が奪取されてしまったとしたら、後の売りは「全訳」であろうか。それとも翻訳の精度であろうか。だが、松本悟朗 [1919] は、高橋五郎 [1919] に一歩先を越されたとはいえ、確実に話題になったようであり、そこそこに売れたのであろう。初版刊行の5日後には再版が出ている。それに続いて松本悟朗氏は次々とラッセルものの翻訳を手がけることになる。きわめて短い期間に『ラッセル論集』と『ラッセル叢書』に結実することになるラッセルものの翻訳である。

江森巳之助氏の「全訳」によって知られるバートランド・ラッセルの『神秘主義と論理』であるが、松本悟朗氏による全和訳が既にあるにもかかわらず、

江森 [1959] では一言も触れられていない。それは松本悟朗氏によるそれが、一九二二年に合冊形式で刊行されたにしても、実際はそれぞれ独自の表題を持つ七冊からなる分冊形式で刊行されたことにもよるのであろう。

江森訳『神秘主義と論理』(1959) 松本訳『ラッセル叢書』(合冊:1921?/1922)

- 一 神秘主義と論理 『(1) 神秘主義と論理』(1921.8)
- I 推理と直観
- II 統一と数多
- III 時間
- IV 善と悪

- 二 自由教育における科学の位置 『(2) 自由教育に於ける科学の位置』
- 三 自由人の信仰 (1921.8)

- 四 数学の研究 『(4) 数学と形而上学者』(1921.9)
- 五 数学と形而上学者たち

- 六 哲学における科学的方法について 『(5) 哲学に於ける科学的方法』(1921.10)

- 七 物質の究極的諸要素 『(6) 物質の究極的要素』(1921.10)

- 八 感覚与件の物理学に対する関係 『(3) 物理学対感覚與料の関係』(1921.9)
- I 問題の提示
- II 感覚与件の諸性質
- III センシブリア
- IV 感覚与件は物的である
- V 「センシブリア」と「諸物」
- VI 構成物対推論
- VII 私的空間および諸パースペクティヴの空間
- VIII 「諸物」および「諸センシブリア」のパースペクティヴ空間への配置
- IX 物質の定義
- X 時間

XI 諸物および物質の持続

XII 錯覚、幻覚、ならびに夢

九 原因という概念について 『(7)原因の観念に就て

十 直知による知識と記述による知識 (8)直知と叙述知』(1921.11)

(未完)

【略号・参考文献】

安藤貞雄

[1991]: 訳『ラッセル 幸福論』岩波文庫

市井三郎 <1922-1989>

[1966]: 「解題 社会改造の諸原理」『世界の思想26 ラッセル』河出書房新社: 東京
江森巳之助

[1959]: 訳『バートランド・ラッセル著作集4 神秘主義と論理』みすず書房: 東京
金沢篤

[1990]: 「書評『縁起と空—如来蔵思想批判—』(松本史朗著)」『駒大仏教学部論集』第
21号

[2009]: 「戯曲『シャクンタラー姫』の和訳—「カーマ・シャーストラ」受容史構築の
ために—」『駒澤大学仏教学部論集』第40号

鹿野政直

[1964]: 著『明治の思想』筑摩書房: 東京

茅原華山 <1870-1952>

[1915]: 著『銀杏の葉蔭』実業之日本社: 東京

[1929]: 著『韜晦以後茅原華山文集』内観社: 東京

茅原健

[1985]: 著『茅原華山と同時代人』不二出版: 東京

[2002]: 著『民本主義の論客茅原華山伝』不二出版: 東京

國木田獨歩 <1871-1908>

[1901]: 著『武蔵野』民友社: 東京

勢多左武郎 <1888-1981>

[1972]: 「『第三帝国』から『洪水以後』へ—あのころの若人たち—」『たちばな』第37号

[1973]: 「続『第三帝国』から『洪水以後』へ—あのころの若人たち—」『たちばな』第38号

[1974]: 「『洪水以後』が登竜門」『広津和郎全集』第8巻・月報4 中央公論社: 東京

高橋五郎 <1856-1935>

[1904]: 訳『ファウスト』(ゲーテ著) 前川文栄閣: 東京

[1906]: 著『釈迦論』前川文栄閣: 東京

[1919]: 訳『社会改造の原理』(ラッセル著) 文志堂: 東京

高橋五郎・小森彦次

[1907]：共訳『梵劇 さくんたら姫』（カーリダーサ作）前川文栄閣：東京
野村隈畔<1884-1921>

[1920?/1922R]：著『孤獨の行者』京文社：東京

飛田良文

[1968]：「高橋五郎と『漢英対照いろは辞典』」『言語生活』第199号

広津和郎<1891-1968>

[1951]：著『神経病時代・若き日』岩波文庫

[1952]：著『同時代の作家たち』新潮文庫

[1963・67]：著『年月のあしおと』（正・続）講談社：東京

[1965]：著『廣津和郎 初期文芸評論—洪水以後時代・作者の感想—』講談社：東京
福田久賀男

[1973]：「私信—愛と自由の哲学者 野村隈畔のこと—」『たちばな』第38号

[1984]：「『洪水以後』改題」『復刻版 洪水以後』別冊 不二出版：東京

堀秀彦

[1952]：訳『幸福論³⁰』（ラッセル著）角川文庫

松本悟朗<1886-1945>

[1916]：「『第三帝国』滅亡史」『洪水以後』第1号

松本史朗

[1973]：「祖父悟朗を思う」『たちばな』第38号

[2010]：「インド論理学会の思い出」『インド論理学会研究』創刊号

美作太郎<1903-1989>

[1975]：「バートランド・ラッセル—『社会改造の原理』を読んだ頃」『EDITOR』5月号

【註記】

- 1 本稿は、わたしが責任を持つインド論理学会のブログ（<http://blog.goo.ne.jp/indianlogic>）にアップした文章に基づくもので、新味に乏しく内心忸怩たるものがあるが、近代日本における異文化紹介に尽力した<翻訳者たち>という観点に立つての新たな一連の作業の不可欠の一環と考えて、敢えて紙面への活字化を断行した。諒とされたい。
- 2 広津和郎の最初期の自伝的小説「若き日」の一節。広津和郎 [1951] 117頁。
- 3 松本史朗氏による誤記誤植訂正済みの「修訂版」は、註1のブログに掲載されている。
- 4 岩野泡鳴については本稿の続編の中で論ずることになる筈である。
- 5 松本悟朗氏の略歴に関してほぼ同一の文が茅原健 [2002] 129頁にもある。
- 6 松本悟朗氏の著訳書に関しては次節で詳細に紹介するが、茅原健 [1985] に掲げられた松本悟朗氏の著訳書リストのうち『文化の話』だけは、松本悟朗氏ではなく浅野利三郎氏の著作。松本悟朗 [19220620] 『哲学の話』と同一の<吾等何を学ぶべき乎>叢書の第1期第2編。最近松本史朗氏より伝聞したことであるが、氏も所蔵している『文化の話』が著者名を記した<扉>を欠く破損本で、これまで松本史朗氏もそれが

祖父悟朗氏の著書であると受け止めてきたとの由。奥付には〔叢書の〕編纂者の氏名があるばかりで著者名は記載されていない。もしかしたら茅原健 [1985] のその誤記の原因は松本史朗氏よりの誤った情報に基づくものかもしれない。

- 7 大正デモクラシーの実情をうかがう貴重な資料と思われる雑誌『第三帝国』『洪水以後』が、不二出版によって複製されているが、宣伝パンフレットの論調も含めて、ともすればそれら稀観雑誌の複製が、文学者広津和郎研究の新資料発掘を強調する形で展開されたように思われる。
- 8 茅原華山（＝茅原廉太郎）氏とその弟茅原茂氏、華山氏の次男茅原退二郎氏とその息子茅原健氏などの茅原ファミリーについては茅原健 [1985] [2002]などを参照のこと。
- 9 (<http://russell.cool.ne.jp/MIMASA01.HTM>) 参照。
- 10 『洪水以後』の松本悟朗氏担当の「評論（社会）」欄誌面内のコラム「そゞろごと」の記事。書き手が松本悟朗氏であることはまず間違いないところである。続く「評論（文芸）」欄を担当している広津和郎氏に対する同評は「広津和郎君は一寸泉鏡花を思はせるやうなやさ男、嫌味といふもの更になく、気立ても優しい方なれば、先づ一般の女に愛さるべし。但し新しい女や生意気な芸者などには向きそうもない。併し芸者でも海千山千の苦労者なら、却つてあんな方となら一苦労して見たいわなどと言ひ出すかもしれぬ。」(37頁)とある。
- 11 だが、『第三帝国』第九号（大正三年四月十六日号）掲載の松本悟朗「女性と創造」冒頭に「自分は数年前に女性の心理に関する一書を公けにした（他人の名義で）。故に詳細の事を其方に譲るとして、茲には特に女性の創造力に関して簡単に私見を述べて見たいと思ふ。」とある。不思議な記述だが、仮にこれが真実だとすると松本悟朗氏の最初の著作が、大正三年（1914）年以前にあることになる。鋭意調査を進めているが、まだその書物を特定できていない。ただし、発行年と表題より推理すると、以下の二書の何れかがそれに該当するようである。この二書とも幸い手元にあつて読めるのだが、文体等から松本悟朗氏のものとならして同定できるだろうか？ それとも、他に候補があるだろうか？

村田天籟著『婦人の心理』実業之日本社：東京 明治44年6月

今井政吉著『女の心理』東海堂：東京 明治44年10月

この二書が刊行された明治四十四（一九一〇）年は、例えば鹿野政直氏が「一九一〇年は日本の女性にとって記念すべき年となっている。この年九月一日の日付で、平塚らいてうらによって、雑誌「青鞥」が創刊されたからである。」(鹿野 [1964] 246頁)と言うように、わが国に於ける婦人問題研究史にとって重要な年である。『第三帝国』などでの松本悟朗氏の記事にも反映している通り、松本悟朗氏の眼差しは、ひとつにはこの婦人問題に向けられていたと言ひ得るであろう。

- 12 手元にあるものは初版発行日の5日後の再版本。1920年5月1日発行の増補第九版には「1920年1月」の日付のある「訳者より読者へ」が収録されているとの由。
- 13 本書はその表題より想像される通り、これに先だつて刊行されたラッセルの四著作の翻訳『社会改造の原理』『政治の理想』『自由への道』『戦争と正義』を一冊に合集

- したもので、巻頭に「大正九年十二月三十一日 松本生識す」とある序文「社会改造家としてのラッセル」と、「一九二一年一月 編者識」とある「例言」が付されている。「例言」によれば、『社会改造の原理』中、第七講の終りと第八講の全部』は時國理一氏、『自由への道』中、第一編の全部』は板橋卓一氏、「第二編の第四章より第七章まで』は時國理一氏、『戦争と正義』は全部』時國理一氏が担当し、「他はすべて」松本悟朗氏の手になるものという。
- 14 後述するように、『ラッセル叢書』は実質、第一分冊の表題『神秘主義と論理』を表題として持つラッセルの原書 *Mysticism and Logic*, London, 1918の全訳（+α）である。
- 15 手元に二冊あるが、その一冊の奥付によれば、初版発行の一ヶ月後に再版が、さらに一ヶ月後には三版が、初版発行の五ヶ月後には四版が出たとある。そしてその一ヶ月後の第五版。もう一冊は、初版発行の二年後の第十版本。いずれにしてもかなり売れた書物のようだ。だが、WebCat 検索による限り、現在本書を所蔵している大学図書館はわずかに三館のみ。
- 16 [1924]：著『近代社会思想八講』新报社：東京の出版社を変えての再刊本。
- 17 表題が若干変わっているけれど、[19200205]：訳『政治の理想』（ラッセル著）日本評論社出版部などの再刊本。
- 18 [19210415]：訳『労働運動と新哲学』（スコット著）世界思潮研究会：東京の再刊本。
- 19 [19210415]：訳『労働運動と新哲学』（スコット著）世界思潮研究会：東京の再刊本。
- 20 表題が変わっている。単なる再録版か改訳版かは不明。ただし、先行同書にあった伏せ字箇所はきちんと収録されているので、文字通りの「全訳」版と言える。
- 21 表題と著者名表記は異なるが、[1930]：訳『女性禍—近代フェミニズムの破綻—』（クヌッドセン著）一元社：東京と同一。
- 22 表題と発行所は異なるが、[1931]：共編『尖端語百科辞典』尖端社：東京（早坂二郎）とおそらく同一書。
- 23 非売品の薄いパンフレット。
- 24 非売品の薄いパンフレット。
- 25 [1924]：著『近代社会思想八講』新报社：東京の著者没後の再刊本。
- 26 [1931]：共編『尖端語百科辞典』尖端社：東京（早坂二郎）の現代の復刻本。
- 27 バートランド・ラッセルの本邦に於ける最初の紹介者たる高橋五郎氏に関しては、『シャクンタラー姫』や『ファウスト』の翻訳者として、「実のところ、この「シャクンタラー姫」の最初の全和訳者の一人、高橋五郎氏が、ゲーテの傑作「ファウスト」（第一部）の最初の全和訳者であることはほとんど知られていないのである。」（金沢[2009] 445頁）と、既にわたしも言及したことがある。明治・大正期の精力的な翻訳者として名高い高橋五郎氏については、本稿の続編の中で改めて論じる予定である。氏は、わたしが現在奉職する駒澤大学の教員であったこともある。高橋五郎氏については、既に色々論じられているが、例えば『増補改訂 日本文学大辞典』第四巻（1950）449頁などを参照。
- 28 松本悟朗氏にとってここで言う危篤の「父」とは、養子となった福島慈雲寺の住職、義父の松本達宗氏であろう。

- 29 文学界の同人としても名高い馬場孤蝶氏と松本悟朗氏の関係についても興味深く思われるが、ここでは二人とも雑誌『第三帝国』の執筆者であったという事実のみを記すに留める。
- 30 バートランド・ラッセルの著作の多くは既に日本語に翻訳されている。翻訳者も多数に上るが、ご多分に漏れず、先行する翻訳に言及していないことが多い。その意味でラッセルの翻訳家としての松本悟朗氏にしっかり言及している市井氏は貴重な存在であると言えるが、この堀秀彦氏も、その堀 [1952] の「あとがき」で、「日本にもいままで幾つも訳書は出版されている。古いところでは松本悟郎氏訳「自由への道」「社会改造の原理」等、」（268頁）と記しているのは注目に値する。が、残念ながら、松本悟朗氏の名前を書き違えている。なお、たとえば安藤貞雄 [1991] は、「本書には、以前二種類の邦訳があり（現在絶版）、参照させていただいた。」（293頁）といった惨状である。